

# Niphates 山上におけるセイタンの独白<sup>(1)</sup>

平 川 泰 司

『失樂園』第4巻の始め、Niphates 山上におけるセイタンの苦悶に満ちた独白が、その読者の想像力に与える強烈な効果にもかかわらず、この詩におけるその重要な機能が、従来比較的等閑視されてきたことは、少し奇妙なことに思われる。<sup>(2)</sup>この独白によって、すでに第1巻、第2巻で確立された読者のセイタンに対する共感<sup>(3)</sup>は、一層確固たるものとなり、読者の思い描くセイタン像は、さらに新しい意味合いを附加される。そしてこの事実<sup>(4)</sup>は、『失樂園』の詩としての意味に、本質的な関り合いをもっているのである。

## 1

私はいま「読者のセイタンに対する共感」ということをいった。だが私は、「ミルトンは真の詩人であった。それでそれと知らずに悪魔にくみしていたのだ。」<sup>(5)</sup>という、すでに十二分に論駁されたブレイクの言葉を、いまさらここに事新しく持ち出そうとしているわけではない。またシェリーにならって、セイタンを「全能の力に対する断固たる忍耐強い反抗」を試みる、「勇氣と偉嚴」<sup>(4)</sup>を兼ね具えた自由の闘士として賛美し、セイタンに、「キリスト教のもっとも圧制的な形態を粉碎した」<sup>(5)</sup>「共和主義者」ミルトンの面影を認めているわけでもない。このような、セイタンを『失樂園』の事実上の主人公とみなす解釈は、あまりにもローマン派的な誤読であり、ここにローマン派のもつ特質の一つが、はからずも露呈されているという意味では、大変興味深いものであるが、『失樂園』の解釈としては、やはり主客転倒の謗りを免れえないであろう。

いわゆるセイトニスト達によるこのような誤読は、セイタンの価値観と彼等の価値観との本質的な同質性に、その原因を求めうる。セイタンはプライドの罪によって天国を逐われた。こ

(1) 本稿は、昭和43年6月30日、十七世紀英文学会関西支部第10回例会において口頭で発表したものに、若干の加筆訂正を行ったものである。

(2) ヘレン・ガードナー女史の著名な論文 'Milton's Satan and the Theme of Damnation in Elizabethan Tragedy', *Essays and Studies*, 1948 (女史の *A Reading of Paradise Lost*, Oxford, 1965 に附録として再録されている。)がこの問題を論じている。だがこの論文は、セイタン論としてよりも、エリザベス朝悲劇論、とくに『フォースタス博士』論として著名のようである。

(3) W. Blake : *The Marriage of Heaven and Hell*, G. Keynes (ed.) : *The Complete Writings of William Blake*. Oxford Univ. Press, 1966, p. 150.

(4) P. B. Shelley : *Prometheus Unbound*, Preface, T. Hutchinson (ed.) : *The Complete Poetical Works of Percy Bysshe Shelley*. Oxford Univ. Press, 1934, p. 205.

(5) *Ibid.*, p. 206.

れは己れを神と対等のものとみなし、さらには神にとってかわろうという、キリスト教でいう七大罪の中でももっとも重大な、その根本を否定する、もっとも悪魔的な罪である。スペンサーの『妖精の女王』に描かれる「プライドの館」において、館の女主人ルチフェラが他の六大罪をお伴にしたがえ、ダンテの『神曲』において、ルチフェロが地獄の最下層、地球の中心に逆さに氷詰めにされているのはこのためである。『失樂園』においてセイタンは、自分が神の被造物であることを否定し、自己の自ずと生れ出ずる力によって生れ出たのだと主張する。

That we were form'd then say'st thou [*i.e.* Abdiel]? and the work  
Of secondary hands, by task transferr'd  
From Father to his Son? strange point and new!  
Doctrine which we would know whence learnt: who saw  
When this creation was? remember'st thou  
Thy making, while the Maker gave thee being?  
We know no time when we were not as now;  
Know none before us, self-begot, self-rais'd  
By our own quick'ning power, when fatal course  
Had circl'd his full Orb, the birth mature  
Of this our native Heav'n, Ethereal Sons. [V, 853—63]

セイタンにいわせれば、同じく自然に生を享けたものとして、彼と神とは対等の地位にあり、したがって、神が支配権を享受していることは道理に背くことである。

Who can in reason then or right assume  
Monarchy over such as live by right  
His equals, if in power and splendor less,  
In freedom equal? [V, 794—7]

かくてセイタンは、失われた自己の自由を回復し、部下を暴君のくびきから解放せんとする「自由の擁護者」(Patron of liberty [IV, 958])を自ら自負し、神に戦いを挑むのである。だがセイタンのいう自由なるものは、キリスト教の立場からすれば、法外な自我の主張にほかならない。その根底に造物主、絶対者としての神の否定があるからである。そしてこの自由は、セイタンの豪語にもかかわらず、けっきょくは自由の放棄、隷属にしかすぎなかった。アブディエルの指摘はやはり正鵠をえていたのである。

Thyself not free, but to thyself enthrall'd; [VI, 181]

他方、ローマン派の著るしい特質の一つに、意識的ではないにしても、強烈な人間の自己主張が認められることは、争えないところである。ローマン派の詩人達にとっては、人間の想像

力こそ宇宙を支配する原理であり、神もいわばこの想像力に吸収されてしまうのである。あるいは、人間自身が神にも比すべき神聖な存在たりうると考えられ、人間自身の手で地上に天国を築きうるという希望が、詩人を熱狂させたのであった。シェリーの『解き放たれたプロメテウス』においては、神の愛、神への愛ではなく、人間相互の愛こそ至高のものとされ、愛によって結合された人間は、自己の運命を支配しうるとされる。そして詩人は、その時現実のものとなるであろう、幸せと生命に満ちあふれた楽園の夢を、憧れをこめて歌いあげるのである。

Man, oh, not men! a chain of linkèd thought,  
Of love and might to be divided not,  
Compelling the elements with adamant stress;

.....

Man, one harmonious soul of many a soul,  
Whose nature is its own divine control,  
Where all things flow to all, as rivers to the sea;  
Familiar acts are beautiful through love;  
Labour, and pain, and grief, in life's green grove  
Sport like tame beasts, none knew how gentle they could be!

[IV, 394—405]

美しい夢であった。だが、それがしょせんは夢にしかすぎなかったことは、その後の歴史が証明している。全世界の人間が愛の絆で結ばれるなどということが、現実にはありえないことであり、「労苦と苦痛と悲嘆」はおとなしく飼い馴らされるところか、以前にもまして激しく猛り狂った、ということだけではない。より根本的に、人間が己れ的能力を過信し、自己の運命を支配しうる聖なる力をもっている、とうぬぼれたことがそもそもの誤りであった。それは本質的にはセイトンの法外な自我の主張と同じことだったのである。そしてこの事実こそ、セイタニストをしてセイトン賛美に走らせたゆえんのものであった。意識的なものでなかったにしろ、両者の価値観の同質性が、両者の共感関係を成り立たせたのである。そして、相対立する価値観の相克を描く『失楽園』を解釈するにあたって、誤った価値観——ミルトンの価値観、それゆえ、ミルトンに接する場合留意すべき価値観、に対立するものという意味で——による誤読は致命的である。

このような誤読を正しい方向に引き戻すのに画期的な役割を果たしたのが、チャールズ・ウィリアムズならびに C. S. ルーイス、特に後者、であったことは、わざわざことわるまでもないであろう。我々はミルトン自身の価値観の存在というものをあらためて意識させられ、同時に、それが『失楽園』のもつ意味を本質的に規定していることを教えられたのであった。かくてセイタニストはその權威を失墜し、それとともに、『失楽園』を「死せる思想の記念碑」<sup>(6)</sup>と

(6) W. Raleigh : *Milton*. Edward Arnold, 1900, p. 88.

みなし、ミルトンをアートの詩人としてのみ賛美する、ウォールター・ローリー流の解釈もまたその説得力を失った。不撓不屈の勇氣をもって逆境に耐え、自由の回復を目指して圧制者と闘う英雄セイトンは、神に対する反抗の論拠を否定され、神の摂理に翻弄される道化にまでおちぶれた。そしてアダムの墮落も、「より幸多い心のうちなる樂園」(A paradise within thee, happier far. [XII, 587]) をうるにいたる契機なのだという、いわゆる「幸運な墮落の逆説」の、この詩においてもつ重要な意味が明らかにされ、『失樂園』はこの逆説を基盤とする「聖喜劇」へと大きく変貌したのである。

C. S. ルーイスなどのこのような神学的解釈は、ミルトン自身の価値観に もとずいているという意味で、真険な考慮が払われるべきものである。だが、一体『失樂園』の真価は聖喜劇であるところにあるのだろうか。『失樂園』が聖喜劇として意味をもつためには、アダムが幸運な墮落の逆説を悟るにいたる第11巻、第12巻の、天使マイケルによる予言の場面、「アダムの教育」の行われる『失樂園』最後の2巻が、詩として秀れたものでなければならない。読者がアダムとともに摂理の奇しき逆説的な働きを悟り、神の恩寵の大きさ、深さに喜悅の涙を流せなければ、『失樂園』は聖喜劇として成功しているとはいえないからである。

O goodness infinite, goodness immense!  
That all this good of evil shall produce,  
And evil turn to good; more wonderful  
Than that which by creation first brought forth  
Light out of darkness; full of doubt I stand,  
Whether I should repent me now of sin  
By mee done and occasion'd, or rejoice  
Much more, that much more good thereof shall spring,  
To God more glory, more good will to Men  
From God, and over wrath grace shall abound. [XII, 469—78]

ところがアディソンは、第11巻はともかくとしても、第12巻において、「作者はいくつかの箇所において、神学に注意を払うのあまり詩をおろそかにした。」と非難し、C. S. ルーイスも、この2巻は芸術的には失敗である、と断じたのである。<sup>(7)</sup>この事実は一体何を物語っているのだろうか。<sup>(8)</sup>

ミルトンの宗教詩と、ミルトンとほぼ同時代の、英国国教を信奉する詩人達の宗教詩——いわゆる形而上詩人達の宗教詩——とを比較してみると、両者の間に根本的な差異のあることがわかる。私には、キリスト教を信じるとはこういうことだ、と断言する用意はない。また宗

(7) J. Addison, R. Steele, and others: *The Spectator*, No. 369. Everyman's Lib., vol. 3, p. 157.

(8) Cf. C. S. Lewis: *A Preface to Paradise Lost*. Oxford Univ. Press, 1961, p. 129.

教体験の個人差はもちろん認められねばならない。だが、信仰というものが人間の論理を超越したものであり、ある点では——そしてこれは決定的な一点であろう——論理の不連続を跳び越えなければならないものであることは、確かなことのように思われる。少なくとも本来はそういうものであったろう。「不条理であるがゆえに信ずる。」といったのはテルトリアヌスであり、「信ずるために理解するのではなく、理解するために信ずる。」とはアンセルムスの言葉である。そして、形而上詩人達の歌う宗教体験はこの種のもののなのである。

ジョージ・ハーバートに『首輪』という秀れた詩がある。この詩において、詩人は神に向けてわめきたてる。神の義を疑うのである。だが、悪口雑言の限りをつくしているときに、ふと神の慈愛に満ちた声に気付く。「我が子よ。」すると、いままでのかんしゃくはどこへやら、詩人はたちまち従順な神のしもべになってしまうのである。

But as I rav'd and grew more fierce and wilde  
At every word,  
Me thoughts I heard one calling, *child!*  
And I reply'd, *My Lord.*

まるで恋人どうしの痴話げんかである。詩人は女である。男のやさしい言葉に、たったいま「もうけっこう。出て行きます。」(No more. / I will abroad.) とヒステリックにわめいたことも忘れ、理屈もなにもなく、女は男とよりを戻してしまうのである。それどころではない。詩人と神との関係は、男女の肉体関係で表わされることもある。当時男を知らない女は一人前の女とはみなされなかったが、ダンにおいて、神を愛しながらも悪魔と言い交してしまった詩人は、神の手でむりやりにいいなずけから引き離され、閉じ込められ、奴隷とされるまでは自由でありえず、神に操を奪われるまでは貞節ではありえないのである。

Yet dearly I love you, and would be lov'd faine,  
But am betroth'd unto your enemy,  
Divorce mee, untie, or breake that knot againe,  
Take mee to you, imprison mee, for I  
Except you enthrall mee, never shall be free,  
Nor ever chaste, except you ravish mee. [Holy Sonnets, 10]

隷属即自由、凌辱即貞節。これは論理のよく説明しうところではない。だが、愛とは本来こういうものであり、論理を超越したものではなからうか。

ところが時代が下ると、神に対する愛には、論理による説明が要求されるようになってくる。もはや不条理ならば信じることができず、理解しなければ信じることができなくなってくるのである。人間の理性にもとづいて神を説明しようとした理神論などは、そのような傾向が著るしく表れた例である。そして、圧倒的な理神論の流れに抗して、正統的な信仰を守ろうと

したジョウゼフ・バトラーでさえ、やはり時代の影響は免れえず、「類推」による説明を試みたのであった。<sup>(9)</sup>造物主としての神 (God of Nature) は認めるけれども、啓示の神 (God of Revelation) は認められないとする理神論に対して、バトラーは次のように反論した。いや弁明したという方が正しいだろう。宇宙は造物主によって美しく、調和よく創造された。それにもかかわらず、この宇宙には悪が厳然として存在する。——樂觀的なシャーフツベリーに対して、バトラーが悲觀的だとされるのは、このような認識のゆえである——だがこの悪は、人間の目にそうみえるだけであって、じつは神の善の目的のために、神によって逆用されているのだ——幸運な墮落の逆説——と考えられる。それならば同様に、一見不合理と思える、奇蹟を行う啓示の神の存在というものも、じつは人間にそう思えるだけなのではなかろうか。このようにバトラーは、類推によって正統的な啓示の神の存在を立証しようとしたのである。なるほどバトラーは正統を守ろうとした。だが、バトラーと形而上詩人との間には、根本的な差異のあることは明らかであろう。

ミルトンを特徴づけるものの一つに、神に対する疑いから論理を用いての自己説得、そして納得した上での神への帰依、というパターンがある。『盲目になりて』において、詩人は、神は光を奪っておきながら昼の仕事を強いなさるのか、と神の義を疑う。

“Doth God exact day-labour, light denied?”

しかし詩人はすぐに思い直す。神は人間の業、人間の才能など必要とはなさらないのだ。神の命をうけ、陸を越え、海を越え、忙しく駆けずり回っている天使も、神の側近く、じっと仕える天使も、同じく神に仕えているのだ。

“God doth not need

Either man's work or his own gifts. Who best  
Bear his mild yoke, they serve him best. His state  
Is Kingly: thousands at his bidding speed,  
And post o'er land and ocean without rest:  
They also serve who only stand and wait.”

詩人は納得している。このソネットの魅力は、懷疑を乗り越え、ついに神に帰依するにいたった、深々とした悟りの境地にあるといえよう。だが、一見深く澄みわたった深淵の底に、論理によって自己を納得させようとする必死の努力がひそんでいることを感じないであろうか。ミルトンにあってはすでに、論理の不連続を跳び越えることはできないのである。逆説的な神の摂理にも、何等かの説明をほどこさなければ納得がいかないのである。そしてミルトンにおいて深く我々の胸をうつものは、本来不連続なものを連続させようとする強靱な意志、いいかえ

(9) Cf. J. Butler: *The Analogy of Religion, Natural and Revealed, to the Constitution and Course of Nature.*

れば、もはや逆説を逆説としてすなおに受け入れられなくなっているにもかかわらず、何とかして逆説を信じようとする、すなわち神を信じようとする、強烈な倫理的意志なのである。

理神論にいたればこの強烈な意志は消滅する。逆説は公式として、倫理的な苦闘をへずに、自明のこととして受け入れられる。アダムの墮落は幸運な罪 (*felix culpa*) だったのだ。神の摂理は逆説的に働くのだ。それなら何も悲しむ必要などないではないか。それならと、ベントリーは、楽園を遂われゆくアダムとイーヴの姿を描く、哀感に満ちた『失楽園』最後の2行を、次のように改作した。

THEN *hand in hand with SOCIAL steps their Way*  
Through Eden took, WITH HEAV'NLY COMFORT CHEER'D<sup>(10)</sup>

これほどばかげた改作はなかろう。ミルトンの持ち味がすっかり失われてしまっている。

ミルトンの描くアダムとイーヴは、二人がいままで幸せに過ぎてきた楽園を振り返り、思わずはらはらと不覚の涙を落す。だが、二人はすぐに涙を拭い去る。摂理が導いて下さるのだ。泣いてはいけないのだ。——絶望は神の恩寵を信じない頑なな心を示し、それゆえ罪である。『妖精の女王』において、「赤い十字架の騎士」の最後におちいる罪は絶望の罪である——こう自らに言いかけつつ、二人は手に手を取りあって、淋しいエデンをとぼとぼと歩んでゆくのである。

Some natural tears they dropp'd, but wip'd them soon ;  
The World was all before them, where to choose  
Thir place of rest, and Providence thir guide :  
They hand in hand with wand' ring steps and slow,  
Through *Eden* took thir solitary way. [XII, 645—9]

この神を信じようという倫理的な意志、これがミルトンを特徴づけるもののなのである。ミルトンは逆説的な摂理と真陰に対決したという点で、理神論者とは大きなへだたりがある。しかし、本来論理をもってしては説明しえない逆説を、論理をもって説明せざるをえなかったという点で、形而上詩人とは本質的に異なるのである。ミルトンはやはり、理神論の方向へ明確な第一歩を踏み出しているというべきであろう。

かくてミルトンにとっては、逆説的な神の摂理の働きを悟っての歓喜などというものは、あまり想像力を駆り立てるものではなかった。『失楽園』の予言の場面の、詩としての出来栄があまりかんばしくないのは、ここにその原因を求めよう。

ミルトンの想像力は、神を信じようとする誠実な、熱烈な倫理的努力を描くとき、その本領を発揮する。ミルトンにはいわゆる *beatific vision* が、生涯を通じてあまりみられない。だ

(10) J. B. Broadbent : *Some Graver Subject ; An Essay on Paradise Lost*. Chatto and Windus, 1960, p. 285 より再引用。

がそれにかわるものが、人間の倫理的努力の成果に対する、熱烈な願望をこめたヴィジョンである。

Methinks I see in my mind a noble and puissant Nation rousing herself like a strong man after sleep, and shaking her invincible locks: Methinks I see her as an Eagle muing her mighty youth, and kindling her undazl'd eyes at the full midday beam; purging and unscaling her long abused sight at the fountain it self of heav'nly radiance;<sup>(11)</sup>

もちろん倫理的側面のないキリスト教などというものは考えられない。だが、神の思寵よりも人間の倫理的努力の方に重心が移るということは、ある意味では、キリスト教の墮落である。少くとも本質的な変質である。人間の倫理的努力それ自体が意味をもつようになってくるからである。ミルトンのヴィジョンとシェリーのヴィジョンとの間には、なお大きなへだたりがある。しかし、ミルトンはすでに、シェリーの方へ一歩を踏み出しているのである。カソリシズムからプロテスタンティズムへの移行にともなって、文学作品のテーマに、「十字架にかけられ、そして甦ったキリストから、墮落し、そして再生したアダムへの力点の推移」<sup>(12)</sup>がみられるというブロードベントの指摘は重要である。これはとりもなおさず、力点が神の恩寵から人間の倫理的責任へと移行した、ということだからである。青年ミルトンは『キリストの受難』<sup>(13)</sup>を未完のまま放棄した。彼はそれを自己の未熟さのせいにはしている。だが、題材の選択を誤ったというのが、本当のところではなかろうか。

セイタンを道化とみ、『失樂園』を聖喜劇とみなすことが誤りであることは、上に述べたことで明らかであろう。セイタンを道化とみようとする意志、『失樂園』を聖喜劇とみようとする意志こそ、その誠実な倫理的努力こそ、『失樂園』を価値あらしめているものなのである。

## 2

セイタンに関して我々は、一つの事実を虚心に認めなければならない。それはセイタンは読者の共感を喚ぶという事実である。とはいえ私は、ティリヤードあるいはウォールドックにならって、『失樂園』にミルトンが意識していなかった意味 (unconscious meaning) を読みとろうとしているわけではない。——文学作品である以上、多かれ少なかれ、「無意識の意味」は存在するであろうが——あるいは、文学作品は現代の価値観にもとずいて解釈されねばならない、としているわけでもない。叙事詩という、時代精神の体现を目指すジャンルにあっては、正しい解釈のためのみならず、作品を味わい、そこから我々自身の精神の糧をうるために

(11) *Areopagitica*, E. Sirluck (ed.): *Complete Prose Works of John Milton*, vol. II. Yale Univ. Press, 1959, pp. 557—8.

(12) *Op. cit.*, p. 17.

(13) This Subject the Author finding to be above the years he had, when he wrote it, and nothing satisfied with what was begun, left it unfinished. [Postscript to *The Passion*]



も、その時代精神を一時容認することが必要である。

仮面劇『コウマス』に登場する悪魔コウマスが、伝統的な醜惡な悪魔ではなく、ルネサンス宮廷人的性格を具えていることは、諸家の指摘するところである。コウマスは世俗的価値観を体現する人物なのである。そして世俗的価値観は、当然のことながら俗耳に入りやすい。かくて、自然の恵みを享受することがなぜいけないのだとする、コウマスの巧みな貴婦人誘惑の言葉は、多くの読者を魅了したのである。

Wherefore did Nature pour her bounties forth  
With such a full and unwithdrawing hand,  
Covering the earth with odours, fruits, and flocks,  
Thronging the Seas with spawn innumerable,  
But all to please and sate the curious taste?

.....

List Lady, be not coy, and be not cosen'd  
With that same vaunted name Virginitie; [ll. 710—38]

セيطانについても同じことがいえる。セيطانは、角を生やした、尻尾のある、ひづめの割れた、恐ろしくはあるがいくぶんひょうきんな、ゲーテの『ファウスト』に登場するメフィストフェレスのような、伝統的な悪魔ではない。おちぶれたとはいえ、いまだかつての天使長としての威厳を失わぬ、堂々たる首領である。

... his form had yet not lost  
All her Original brightness, nor appear'd  
Less than Arch-Angel ruin'd, and th'excess  
Of Glory obscur'd : [I, 591—4]

地獄の火に焼かれながらも、敗軍の将セيطانはなお不撓不屈の勇気を失わず、敵に復讐を誓う。

What though the field be lost?  
All is not lost; the unconquerable Will,  
And study of revenge, immortal hate,  
And courage never to submit or yield :  
And what is else not to be overcome ? [I, 105—9]

部下を思う心もあつい。自分を信じてともに神と戦いを交え、武運つたなく生れ故郷の天国を遂われ、いまは地獄に呻吟する配下の軍勢を見渡して、セيطانは、長としての責任に胸痛み、「天使の涙」を流す。

He now prepar'd

To speak ; . . .

Thrice he assay'd, and thrice in spite of scorn,

Tears such as Angels weep, burst forth : . . . [I, 615—20]

この涙に心うたれない読者はおそらくないであろう。

もちろん、先にも述べたように、無条件のセイタン賛美は誤りである。我々は詩人自身のコメントに注意を払わなければならない。セイタンは自分自身の力で地獄の火の海から脱れ出たのだとうぬばれている。

Both (*i.e.* Satan and Beëlzebub) glorying to have scap't the *Stygian* flood  
As Gods, and by thir own recover'd strength,  
Not by the sufferance of supernal Power. [I, 239—41]

だが事実は、上の引用文の最後の行にも皮肉に示されているように、神の許しによってなのであった。そしてセイタンはやはり神と人間との不倶載天の敵なのである。加うるに、セイタンのたくらむ悪事はすべて自身にはね返り、人間に神の恩寵をもたらす契機となるだけなのである。

So stretcht out huge in length the Arch-fiend lay  
Chain'd on the burning Lake, nor ever thence  
Had ris'n or heav'd his head, but that the will  
And high permission of all-ruling Heaven  
Left him at large to his own dark designs,  
That with reiterated crimes he might  
Heap on himself damnation, while he sought  
Evil to others, and enrag'd might see  
How all his malice serv'd but to bring forth  
Infinite goodness, grace and mercy shown  
On Man by him seduc't, but on himself  
Treble confusion, wrath and vengeance pour'd. [I, 209—20]

詩人は繰り返し繰り返し、セイタンは罪を犯し、罪をたくらむ下劣な悪魔であり、神に翻弄される道化であり、『失樂園』は聖喜劇であることを、読者にいいきかせる。だが、それにもかかわらず、セイタンが読者に共感を感じさせるというのは、厳然たる事実なのである。そして、ヘレン・ガードナー女史もいうように、「いくら『セイタンは馬鹿である。』ということ論証してみたところで、一般読者が強情にセイタンを英雄視し続けるならば、それだけでは

不十分なのである。<sup>(14)</sup>」我々のなすべき仕事は、この共感の原因を探り、その『失樂園』の意味との関り合いを吟味することであろう。

ミルトンが、ホーマー、ヴァージル、タッソー、アリオストなどの伝統的叙事詩——アリオストの『狂乱のオルランド』は、スペンサーの『妖精の女王』と同じく、現在ではロマンスとして扱われるが、ミルトンのいう「英雄詩」(heroic poem) にはロマンスも含まれる。そして、ミルトンにおいてもドライデンにおいても、英雄詩は叙事詩を意味する——と『失樂園』との差を強く意識し、それを強調していることは、あまりにも有名である。武人の勲ではなく、忍耐と殉教こそ真に英雄的な行為であり、それゆえ真の英雄詩の主題なのである。

Not sedulous by Nature to indite  
Wars, hitherto the only Argument  
Heroic deem'd, . . .  
. . . the better fortitude  
Of Patience and Heroic Martyrdom  
Unsung ;

[IX, 27—33]

この忍耐と殉教は、直接にはキリストの受難を指すのであろうが、同時にこの詩の主人公アダムの、楽園追放後のクリスチャンとしての敬神の生活をも意味していると思われる。

ところで、古典詩人達よりも一層古典的であると自負し、十八世紀流の古典主義を杓子定期に適用した、擬古典主義時代の批評家達には、古典叙事詩に範をとった『失樂園』にも、いろいろの欠点が目に映じた。当時の叙事詩作法に従えば、叙事詩の主人公は、武勇にだけ、聡明で抜け目なく、統率力に秀れ、不撓不屈の勇気を持ち、愛を知る勇士ということになっていた。そして長い間各地を放浪し、逆境に耐え、ついに英雄的武勲によって敵に勝利を取めるのである。ところが『失樂園』は、この点に関しては、叙事詩作法を守っていないのである。主人公アダムは、力弱くもセイタンの餌食となってしまうのである。そこでドライデンは、悪魔が「騎士を打ち負かし、城から追い出し、婦人とともに世界を放浪させる」<sup>(15)</sup>——『失樂園』がロマンスになっている——ようなことにならざるをえない題材を選んだということで、ミルトンに不満をもらした。これに対してジョンソンは、アダムの英雄的態度を認め、「主人公が不幸であってはならないという理由はない」、「成功と徳とは必ずしも両立するものではないのだから」<sup>(16)</sup>といてミルトンを弁護した。だが、ドライデンの批評には、一つの重大な事実が明らかにされている。叙事詩作法の観点よりすれば、セイタンが『失樂園』の主人公といえるのである。

(14) H. Gardner : *A Reading of Paradise Lost*, p. ix.

(15) J. Dryden : *Dedication of the Aeneis*, W. P. Ker (ed.) : *Essays of John Dryden*. Russell & Russell, 1961, vol. II, p. 165.

(16) S. Johnson : 'John Milton', *Lives of the English Poets*. Everyman's Lib., vol. I, p. 103.

これは大きな意味をもつ事実である。先にも述べたように、叙事詩は時代精神を体現するものである。その主人公はその時代の理想像なのである。したがって、伝統的叙事詩の主人公としての資質を具えているセイタンは、伝統的、世俗的価値観を理想的に体現している人物なのである。そして『失樂園』において、ギリシャの神々がセイタンの部下とされ、『復樂園』において、ギリシャの学芸もセイタンの王国に属するものとされていることを考えるならば、セイタンの体現する伝統的、世俗的価値観は、人間的価値観といいかえてもよいであろう。

このようにしてミルトンは、『失樂園』において、伝統的叙事詩を否定することによって、人間的価値観を否定し、キリスト教的価値観を教えようとしたのである。人間的価値観はもとより人間の本性に根ざしたものであり、ミルトンも我々も、それを簡単に否定することなどできないことである。それゆえ、セイタンを道化として軽くみるということは、この否定の倫理的な努力を無効にしてしまうことであり、『失樂園』を『失樂園』たらしめているところのものを、消滅させてしまうことである。ルネサンス時代の文学理論によれば、文学作品の果すべき役割は、楽しませ、教えることであつた。ミルトンは、おもしろい物語りにとまりいっぺんの教訓を織り交ぜる、といったふうな幼稚なやり方ではなく、セイタンに人間的価値観を体現させることによって、読者をセイタンに対する共感へと誘い込み、ついでセイタンが道化であることを示すことによって、人間的価値観の空しさを教えようとしたのである。読者自身の抱く価値観が否定されるのである。これこそ正真正銘の読者の教育というものであろう。我々はセイタンの魅力をすなおに認めることによって、『失樂園』から最大の精神の糧をうることができるのである。

## 3

第1巻、第2巻で読者の共感を確保した、伝統的、世俗的、人間的価値観を体現する、伝統的叙事詩の主人公としてのセイタンは、Niphates 山上での独白によって、さらに新しい意味合いを付け加えられ、叙事詩の主人公以上の人物へと大きく変貌する。

ここにいたって我々は、セイタンも物事の正邪を正しく判断しうる能力 (conscience) の具っていることを知らされる。

Now conscience wakes despair

That slumber'd, . . .

[IV, 23—4]

セイタンはプライドと野望こそ自己の破滅の原因であり、神は無敵であることを承知している。恩寵あふれる神に背いたことは、道理にもとることであつたことも悟っている。そしてさらに、自分が神の被造物であることの否定という、もっとも悪魔的な論理も、ここでは放棄されているのである。

Till Pride and worse Ambition threw me down

Warring in Heav'n against Heav'n's matchless King:

Ah wherefore ! he deserv'd no such return  
From me, whom he created what I was  
In that bright eminence, and with his good  
Upbraided none ; nor was his service hard.  
What could be less than to afford him praise,  
The easiest recompense, and pay him thanks,  
How due !  
〔IV, 40—8〕

さらにセイタンは、現在自分がおちこんでいる状況をも正しく認識している。

Me miserable ! which way shall I fly  
Infinite wrath, and infinite despair ?  
Which way I fly is Hell ; myself am Hell ;  
And in the lowest deep a lower deep  
Still threat'ning to devour me opens wide,  
To which the Hell I suffer seems a Heav'n. 〔IV, 73—8〕

すべては心の持ちよう次第、それによって地獄も天国になり、天国も地獄になる、と豪語したのはセイタンではなかったのか。

The mind is its own place, and in itself  
Can make a Heav'n of Hell, a Hell of Heav'n. 〔I, 254—5〕

——このようなストイシズムは、神に頼らずに、自己の力による自己の救済を目論んでいるという意味において、異端である。だが、叙事詩的価値観からすれば、何と英雄的なことか——セイタンは自己の行為の非を悟り、自分がいま呻吟している真の地獄、魂の地獄から脱れる道はただ一つ、神に従うことであると知っている。

... is there no place  
Left for Repentance, none for Pardon left ?  
None left but by submission ;  
〔IV, 79—81〕

だが、絶望に頑なになった心は悔悟を受け入れない。彼は自由意志を失ったのである。もはや善を行えないのである。

精神的な死は、第二に、義、ならびに 善を行う自由の剝奪であり、罪と悪魔への隷属である。そして、これらはいわば意志の死を形成するのである。<sup>(17)</sup>

かくて彼は、正しい認識と悪魔的な詭弁とに引き裂かれて、悶え苦しむ。神を呪うべきか、自

(17) J. Milton : *The Christian Doctrine*, F. A. Patterson (ed.) : *The Student's Milton*, F. S. Crofts & Co., 1930, p. 999.

己を呪うべきか。

Hadst thou the same free Will and Power to stand ?  
Thou hadst : whom hast thou then or what to accuse,  
But Heav'n's free Love dealt equally to all ?  
Be then his Love accurst, since love or hate,  
To me alike, it deals eternal woe.  
Nay curs'd be thou ; since against his thy will  
Chose freely what it now so justly rues. [IV, 66—72]

えんえん80行におよぶセイタンのこの独白は、このような、真実の正しい認識、悔悟への意志と頑なな絶望との血みどろの格闘で彩られている。これをみて、我々の思い描くセイタン像も、大きな変化をうけざるをえない。第1巻、第2巻地獄の場面でのセイタンの英雄的言動も、じつは内心の苦悶をおしかくしての虚勢ではなかったのか。悪こそわが喜び、というのは一体本音だったのか。

To do aught good never will be our task,  
But ever to do ill our sole delight, [I, 159—60]

ガードナー女史は、自己の行為が「自己の本性に反する」ものであり、「自然の理」(the essential fact of things)<sup>(18)</sup>に背くものであると知りながらも、自由意志を失って、それから脱れることのできない人物の悲劇を damnation の悲劇と定義し、セイタンを、そのような悲劇の主人公として、フォースタス博士、マクベスおよびミドルトンのベアトリス・ジョアンナの系譜に属するものとして位置づけた。卓見である。セイタンはこの独白によって、叙事詩の英雄としての性格に、エリザベス朝悲劇的な悲劇——これが本当の意味での悲劇である——の英雄としての性格を付け加えるのである。我々は、マクベスが正気のまま、ずるずると自然の理に背く行為へとひきずりこまれてゆくのを観る時に感ずるのと同じ畏怖の念と共感を、セイタンにも感ずるのである。

ガードナー女史によれば、「悲劇とは、それを観るものに畏怖と憐憫の念を起こさせる、我々自身を超越したもの」<sup>(19)</sup>であり、「宇宙の神秘」(mystery of things)<sup>(20)</sup>を垣間見せてくれるものである。悲劇の原因となる悪は、人間界を超越した、宇宙的な次元における意味をもつものだからである。それゆえ、もし我々が悲劇の主人公に感情移入して感傷にふけるならば、悲劇の客観性は失われ、悲劇はその悲劇性を奪われる。「我々が主人公と我々とを同一視するとき、悲劇は消滅するのである。」<sup>(21)</sup>

(18) *Op. cit.*, p. 100.

(19) *Ibid.*, p. 117.

(20) *Ibid.*, p. 116.

(21) *Ibid.*, p. 116.

私は、これが秀れた悲劇論であることを認めるに、やぶさかではない。我々は女史によって、悲劇の本質を大いに教えられたのである。だが、我々がフォースタス博士、マクベス、ベアトリス・ジョアンナあるいはセイタンの激しい苦悩に感じる感動は、我々の彼等に対する共感が、その根底にあるのではなかろうか。彼等と同じく我々も、原罪を背負って罪の重荷に苦しみ、自由意志を失って、善への意志と空しい格闘を演じている、悲劇の人物なのである。セイタンののはらわたを絞るような苦悶の独白に、我々自身の姿の投影を認めないような人は、一体いるのだろうか。いるとすれば、それはミルトンのみならず、マーロウにもシェイクスピアにもミドルトンにも縁のない人達であろう。<sup>(22)</sup>

セイタンの苦悩は人間の苦悩である。Conscience をもち、苦悩する悪魔など考えられないからである。かくてセイタンは、伝統的、世俗的、人間的な叙事詩の英雄として読者の人間的共感をえ、さらに悲劇の英雄として、違った意味ではあるが、しかしやはり人間的な共感をうることになるのである。そして、このようなセイタンの人間的な苦悩は、アダム之苦悩を拡大して表現し、その宇宙的意味を明らかにするという、重要な機能を果しているのである。

ミルトンは、セイタンを人間的共感を喚ぶ人物に描いたのち、滑稽な茶番劇で蛇に変身させ、彼が神に翻弄される道化であることを具体的に示す。そして我々のセイタンに対する共感も消滅する。セイタンは否定されたのである。だが、この否定の過程が力をもつためには、否定さるべきものに対する共感がまず大きなものでなければならない。それゆえ、セイタンに対する共感に、すなわち身をゆだねることこそ、『失樂園』の正しい解釈への出発点であり、それから最大のものを引き出す第一歩であろう。

---

<sup>(22)</sup> ガードナー女史の所論についての筆者の見解は、『视界』第11号所載の *A Reading of Paradise Lost* の書評でくわしく述べた。